⑧「宇宙は神々を産み出す機械」、これが『二源泉』の結びの言葉であり、それがベルクソンの形而上学の結論となる。「形而上学入門」は、その結論に至るはずの三〇年に及ぶ探求の、決して研究計画表ではなく、確かな方法をもって事実の領域に踏み出す旅立ちの宣言なのである。とは言え、この宇宙論的形而上学は、本当に事実の検証に耐えるのだろうか。人間を越えて進む生命進化の線上に人間を位置付けるこの形而上学は、どのような「実在」に足場を求めているのだろうか。慎重な検討が必要であるように思われる。

（本学教授　倫理学）

〈キーワード〉直観、実在、生命

東北淪陥期文学の一側面

――疑遅が描いた〝満洲国〟を中心に――

李　青

一、はじめに

淪陥期文学の名称は中国で使われている言い方で、研究対象は主に中国人文人による中国語で創作された文学作品、または中国文人が結成した文学団体のことを指す。東北淪陥地域の場合は当時五族（日本、満洲、漢、朝鮮、ロシア）協和という建国理念を掲げたため、中国の漢民族や少数民族のほかに、日本人の在住者はかなりいたという特異性があった。日本人文学者の活動は活発で、文学の実績も多く残った。日本では（戦前も戦後も）「満洲国」時代に発生した文学を一般的に「満洲文学」という。

中国では八〇年代後半から「満洲国」に生きた作家た

ちに関する研究を本格的に開始し、これまで〝漢奸文人〟として否定されていた文学者に対して、再評価する動きを見せ始めた。九〇年代に入ってから、淪陥期に書かれた文学の復刻版や文学大系、文学作品選集が相次いで出版された。研究においては、淪陥期文学を中国現代史にどのように位置づけるかという新しい視点を提起した学者が現れた。

二、疑遅が描いた〝満州国〟

1、疑遅の生い立ち

一九一三年遼寧省鉄嶺県（現在は市になっている）に生まれる。幼少時代から哈爾濱に移り、北満に育った。本名は劉玉璋である。中東鉄路車務所専科伝習所を卒業し、鉄道員になる。伝習所時代に、ロシア語をマスターした。ゴーリキー、ツルゲーネフ、ゴーゴリなどロシア文学に親しんだ。一九三五年新京（現長春）に移り、国務院総務庁につとめる。一九三六年、同僚の古丁、外文と知り合いになり、「芸術研究会」を結成。一九三七年『明明』（三九年九月停刊）が創刊すると、精力的に創作と翻訳活動に没頭する。劉郎というペンネームでロシア文学の翻訳をしたり、夷遅や疑遅というペンネームで小説の創作をした。〝疑遅〟を一般的に用いることが多かった。以後雑誌『藝文志』を中心に、〝満州国〟が崩壊するまで文筆活動を続けられた。新中国になってから、映画会社で定年退職までロシア映画の仕事に従事していた。二〇〇一年九〇歳の高齢にして、「満洲国」時代を背景にした長編小説『新民胡同』を出版する。

2、疑遅の〝藝文志派〟における創作活動

①『明明』時代

一九三六年疑遅は同じ職場の文学青年古丁、藤更（外文）と〝芸術研究会〟を創設し、文学という道を選択した。一九三七年日本人の稲川朝二路の斡旋の下で、三月に文芸雑誌『明明』が誕生した。疑遅は仲間の古丁、外文らと精力的に創作活動を展開した。この時期は疑遅にとっては創作の黄金時代と言える。

一九三七年五月一巻三号の『明明』に発表された「山丁花」（ユスラウメの花）は当時の文壇で大きな反響を呼

び、「郷土文芸」論争まで巻き起こした。この期間中に、疑遅は『花月集』を出版した（満洲月刊社　一九三八年短編一〇編）。

②前期『藝文志』時代

一九三九年九月「芸文事務所」を発足し、『明明』の元メンバー及び多くの新人の参加で大型文芸雑誌『芸文志』を創刊した。しかし、一九四〇年六月停刊までに三期しか出さなかった。『芸文志』停刊後、主要メンバーの古丁が芸文書房を立ち上げ、書籍の出版に力を入れた。疑遅の『天雲集』（一九四二年）はこの時期に出版した。この小説集は一九四三年第八回文芸盛京賞に入賞した。この他に短編小説集『風雪集』（益智書房　一九四一年）も出版した。

③後期『藝文志』時代

一九四一年三月政府による『芸文指導要綱』が公布し、文芸作品に対する取り締まりが一層厳しくなり、七月に「満洲文芸家協会」が成立された。十一月、『藝文志』は同協会の機関誌として、再スタートを切った。この時の『藝文志』は政府の〝大東亜戦争完遂〟の代弁者に強いられた。疑遅も国策小説の創作から逃れることができなかった。

3、作品からみる疑遅文学の特徴

ここでは疑遅の『明明』時代と前期『藝文志』時代の作品を中心にその特徴を考察する。

疑遅の創作は題材から四つの方面に分類することができる。

①大半を占めているのが下層社会でもがく貧しい人々、彼らに苦痛を与える悪勢力などを題材にしたものである。『拓荒者』『江風』『北荒』『月は沈んだ』などの作品がある。

これら社会の最下層に生きている人々を題材にした小説は、いずれも彼らの苦況と悲運を描いている。その原因を問いつめる表現が乏しいようであるが、時代背景から人々に災難をもたらした原因には、自然災害よりも人為的な災禍が連想させられるであろう。

②疑遅の作品に〝匪賊〟を扱う作品が数篇ある。『郷仇』『塞上行』『郷仇』などの作品がある。

中国系の作家は反日の本音を隠すために、しばしば晦渋な書き方を用いた。例えば、「匪賊」に身を投じるという描き方は、抗日ゲリラを示唆することが多い。密林に身を隠すのが抗日ゲリラの特徴の一つである。

③都市生活を描く作品である。

『黄昏の後』『西城柳』と『失われた光』『クリスマスの風雪』『呼び鈴』『浪淘沙』などの作品は都会の頽廃生活に蝕まれた人々の姿や先の見えない生活の中で苦悶する知識人を描いた小説である。

④異国情調溢れる作品も注目したい。

第一次世界大戦時に、故郷から追われたロシア人の流転の生活を描いた『雁南飛』がこの一例である。エキゾチックな雰囲気を作品に盛り込むこと、これも疑遅の作品の特徴と言えよう。アンドレイ一家の運命を借りて、日本によって、占領された東北の大地から土地、財産を奪われた中国農民の悲哀を訴えた。

4、疑遅作品の芸術性

同時期の作家小松は、『満洲作家論集』（実業印書館一九四三年）で疑遅の作風をこう批評している。

けっして浪費したり、誇張したりしない。常に華麗とは言えないような題材を選び、色のついていないペンで紙に書いている。夷遅は始終、自分が探し求めている素朴なテーマを選び、華麗で、不必要なものを取り除いている。（中略）

夷遅の筆は社会を突き破いている。その中から出てきたのは、美酒ではなく、苦汁である。以前、筆者は夷遅君をこう評価したことがある。強い筆致をもって、荒っぽいあらすじ、簡単な輪郭によって、立派な荒原の流民図を仕上げている。また、冷たさと熱さを織り交ぜた血流によって、森林を開墾している群像図を色づけた。前者は『北荒』のことであり、後者は『山丁花』のことである。

淪陥期東北文学の研究者黄万華は疑遅を〝短編小説の達人〟と評価している。

小松は疑遅文学とロシア文学の共通性を指摘している。

5、中国作家の〝面従腹背〟

疑遅の所属していた〝藝文志〟派は「満洲文壇」においてもっとも日本人、「満洲国」政府に近い存在だった。彼らの出版する雑誌や本の事務会役員、監理長、参与がいずれも日本人の役人や文人の名前が連ねていることから、〝藝文志〟一派の文学活動は政府によって公認されていることが分かる。「満洲国」後期に入ると、「満洲国」の文壇におけるすべての文芸団体は大東亜戦争の戦時動員体制の請負機関と化した。再スタートした『藝文志』に発表された作品は政策を翼賛的な要素が強くなってきたことがよく分かる。疑遅の作品にも国策に沿った作品が現れた。凱歌三部作（『曙』、『望』、『明』）はいずれもそうである。この他に日本語の文芸雑誌にも国策作品が見られる。

はたして、疑遅などは進んでこのような屈辱的な支配に対して心から協力的なのだろうか。当時の実情や彼らの作品の紙背をみると、意外の事実が浮かび上がるのである。

〝藝文志〟一派は時局に迎合し、翼賛的な文章を書きながら、「満洲国」の暗黒面を描く作品を発表し続けていた。いわゆる中国人作家特有の「暗さ」にこだわり通す姿勢に注目すべきところであろう。『藝文指導要綱』が分布後に、日本人作家がこぞって国策に沿った作品を出した中で、中国人作家の作品はどこか踏みとどまっている印象が残る。疑遅の「寒流」（『藝文』満洲藝文聯盟機関誌　一巻一号四四年一月一日）はその一編であろう。もう一つ指摘しておきたい。それは『藝文志』紙面に日本文学の大量翻訳である。如何に当局の眼を盗んで自分たちの必要なもの、到達していないものを補うかを、政府や日本人に近いといえども、〝藝文志〟一派は細心の注意をはらうことが分かる。

「満洲国」後期になると、政治と一線を画することが難しい中、当局を敷衍しながら、「満洲国」の現実に基づいて、疑遅の大部分の小説のように、貧しさの中で、もがき、喘ぐ中国人社会を舞台に、下層民衆の悲哀を描く。彼が最終的にたどり着いたところはリアリズムの手法で「満洲国」の現実を書くことである。もう一つには、暗い現実を暴くことによって、日本が鼓吹する「五族協

和」、「王道楽土」の偽善性を背後から批判する意味にも繋がるであろう。

6、疑遅文学の意義

①「郷土文藝論叢」を巻き起こし、停滞した文壇を活性化した。〝真実の描写、暗黒を暴露する〟創作のスタイルを確立した。

②下層社会の描写を通じて、「満洲国」に生活する多くの中国人の生き様、「満洲国」の実情を把握するにも貴重な材料（文学作品）を残してくれた。

③外国（ロシアなど）文学の翻訳を通じて、世界文学の精華を吸収し、歩み出した淪陥期文学の創作の向上に役立たせた。

（本学助教授　東北淪陥期文学）

〈キーワード〉東北淪陥期文学、藝文志派、東北郷土文学

「遊び」の臨床心理学的な意味について

――人生の後半に注目して――

谷口奈青理

1．「遊び」とは

遊びは、楽しさ・おもしろさなどの快を伴った、活動それ自体を目的とする活動であり、自発的で自由な活動である。したがって、生活に必要な現実的な適応行動とは区別される。歴史家ホイジンガ（Huizinga, J.）は人間を「ホモ・ルーデンス」（遊ぶ人）と位置づけたが、遊びは高等動物の重要な特徴の一つである。

このように遊びは遊ぶこと自体を目的とし、何かを生産することや現実生活における価値から自由な活動であるため、仕事とは対立するものと考えられている。